

じょうもんじだい

2. 縄文時代

はじめに：縄文時代の自然のようすと暮らし

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



現在の林。左がカシワ、右がハルニレ。約8,000年前にはこれらの木々が森をつくった。



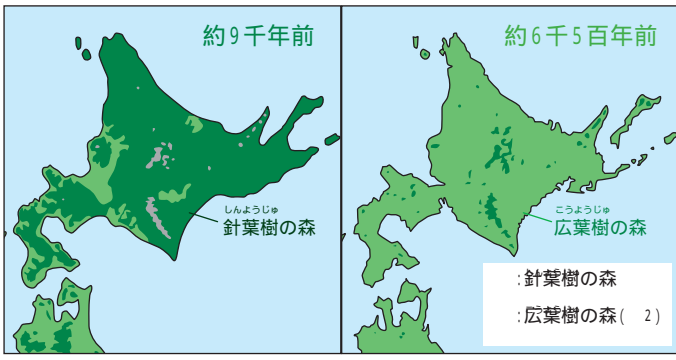
エゾシカ。

寒い「氷期（ p52）」は終わりに向かい、地球は暖かくなっていきました。ただし何度か寒い時期もあり、とくに1万2千年前ころからは、2万年前ころにもどったようなひどい「寒のもどり」がありました。（ p62）

このように寒暖をくり返しながらかも暖かくなるにつれ、エゾマツやトドマツなどの針葉樹が減り、落葉広葉樹の森林が広がってきました。

およそ8,000年前には、今ある自然な林の木とほとんど同じような、ハルニレやオニグルミの木、カエデやドングリ（カシワやミズナラなどの仲間）の木、キハダの木といった木々が森を作っていました。

また、マンモスやバイソンなどの大型の動物は北海道からすがたを消し、エゾシカやヒグマ、ウサギやタヌキといった動物が増えていきました。



約9,000年前には、十勝平野の多くが針葉樹におおわれていたが、約6,500年前には今より暖かくなり、陸地がせばまり、平野のほとんどが広葉樹におおわれた。（参考：「気候変動」より、改変）

河口が少し上流にあった「縄文海進」

およそ6,000年前、暖かさはピークをむかえました。平均気温は、今より2 ほど高かったといえます。

陸の上にある氷がたくさんとけるため、海の水が増え、海水面が今より3～4m高くなりました。そのため、海に近い低い土地には海水が入りこみ、十勝川などの河口も、今より少し上流にありました。

こうしたようすを、海が陸に進んでくるので「海進」といい、この時期の海進を「縄文海進」といいます。（ p64）

暖かくなったあと、寒くなっていく

およそ5,000～4,000年前になると、気候は寒くなっていきます。

トドマツやエゾマツなどの針葉樹や、シラカンバ（シラカバ）といった木が増えていきます。

寒さは地面をこおりつかせ、湿地では「十勝坊主」とよばれる、地面のもり上がりができました。

縄文時代の終わるころには、少し暖かくなり、その後も寒暖をくり返しながらか、今日にいたっています（昔の気温変化のグラフ p62）。



帯広畜産大学（帯広市稲田町）の農場横にある「十勝坊主」。草の集まりではなく、地面がもり上がっている。

1 落葉広葉樹（らくようこうようじゆ）：広葉樹（こうようじゆ）：広く平たい葉を持つ樹木）のうち、冬（熱帯や亜熱帯では乾期）になると葉を落とす樹木のこと。
2 広葉樹の森（こうようじゆのもり）：この場合は落葉広葉樹林。落葉広葉樹林には、

比較的に寒いところの「冷温帯落葉広葉樹林（れいおんたいらくようこうようじゆりん）：ハルニレやミズナラなどの林」と暖かいところの「暖温帯落葉広葉樹林（だんおんたいらくようこうようじゆりん）：クヌギやクリなどの林」がある。約6,500年前に

と き 土器と弓矢を使う

およそ1万2千年くらい前から始まった縄文時代になって、大きく変わったことは、「土器」が使われるようになったことです。土器は、粘土をこねて形にし、火で焼いて作ったナベやカメなどの器です。(土器づくり p88)

土器を使うことで、ドングリや野草などを食べるために、しづみ(アク)をぬくことができ、また、料理法として、煮炊きができるようになりました。木の実を割ったりすりつぶしたりするための、すり石なども使われました。

また、ヤリだけでなく、弓矢を使って動物をとるようにもなりました。大きくてもクマやシカくらいという、小さくてすばしっこい動物をつかまえるためでしょうか?

さらに、魚をとる時には網を使うようにもなりました。(川漁 p93)



と き 土器づくり。



弓矢。



すり石と台石で植物加工。



いし おので木を切る。

(イラスト:帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 4)



ふくげん たてあなしきじゅうきょ (上)復元された竪穴式住居。



ふくげんさぎょう (右)復元作業。地面をほり下げ床にする。保温性は高い。(帯広・原始人の会)

(写真:2枚とも北澤実氏)

たてあなしき しゅうらく 竪穴式の家と集落

縄文時代には、「竪穴式住居」と呼ばれる家が建てられるようになりました。

地面を数十cmほり下げて床にして(これをタテの穴=竪穴という)柱を数本立てた上にヨシ(アシ)などの草や木の皮の屋根をかぶせたものです。この上にさらに土をかぶせるタイプもあります。床のまん中は火をたくところ(炉)で、ここで料理をし、家の中を暖めました。

また、移動しながらキャンプを続けていた旧石器時代とは違って、同じ所にずっと家を持ち、2~5軒くらいの家が集まり(集落)をつくるようになりました。(ただし、季節によって移り住むこともあったようです)

こうずい 川の近くで、洪水にはあわない場所

集落は、多くが川を見下ろした高台に作られます。近くでわき水が出ることも大切だったようです。

川は水や魚を得られるところですし、「道路」としての意味も重要でした。(アイヌ文化と川 p118)

一方、高台であれば洪水にもあわず、水はけがよいため、気持ちよく住むことができます。

こうしたことは、旧石器時代の遺跡と同じです。ただ、縄文時代にはわりあい川に近い場所が選ばれることもありました。

季節によっては、河原のような場所に家をつくって住むこともあったようです。



あかつきいせき だんきゅう かみさつない に ビーめん (段丘:上札内 b面 p54)。この遺跡には、縄文時代だけでなく旧石器時代の人も暮らしていた(p78)。帯広市。

は、道南・道央の海岸部の一部と、本州東北地方の広い部分には暖温帯落葉広葉樹林が広がっていたという。(参考:「気候変動」より)
3 1万2千年前(1まん2せんねんまえ):この本では大正3遺跡の土器(p83)を

もって、十勝の「縄文時代の始まり」としている。
4 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター):帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

土器にも流行がある ... 「文様」や形のうつりかわり

縄文時代の「縄文」とは、縄を転がして土器につけた文様（もよう）のことです。縄文時代とは、基本的に、縄文のついた土器が使われる時代です。

ただし、時期によって文様は変わっていきます。文様がついていないもの、ヘラで線を描いたもの、つめで文様をつけたもの、より糸を棒にまいておつけたもの、四角や丸い型（スタンプ）をおつけたもの、などさまざまです。

中には、川魚の骨をおつけた文様もあります（p92）。作る時の台にしたのか、底にホタテ貝の貝ガラやカシワの葉のあとがある土器もあります（p91）。

また、形についても、オッパイ形の底をした土器、平らな底をしたもの、ポウルのような丸底やとがった底のもの、注ぎ口がついたもの、などというように、いろいろあります。（p83、p92、p95、p96）

こうした土器の種類は、日本列島全体で同じ流れがあり、さらに地域ごとのバリエーションが見られます。帯広百年記念館には、いろいろな時期の土器をならべたコーナーがあります。



時期によって変わっていく縄文時代の土器。（帯広百年記念館）



いろいろな土器の文様。（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵：2）

縄文時代も「石器時代」... 石器の種類にちがいはある



石のヤジリ。縄文時代から作られる。



石のおの。



石のヤリ先。



石のキリ。

旧石器時代に続いて縄文時代となります。しかし、石器時代が終わったわけではありません。石器時代の終わりは、石器にかわって鉄製や青銅製の道具（金属器）が使われるようになった時です。日本列島で金属器が使われるようになるのは、続縄文時代（北海道）や弥生時代（本州以南）になってからです。しかも、続縄文時代や弥生時代でも、まだまだ石器は使われています。

ですから、縄文時代も（続縄文時代も）りっぱな「石器時代」なのです。縄文時代の石器について、旧石器時代と最もちがうことは、矢の先につける「ヤジリ」が作られるようになったことです。また、全面をみがいた石おのが作られることも大きな特ちょうで、自然のようすが変わったことと関係しているようです。

そのほか、魚とりの網につけるおもりも作られるようになりました（p93）。

（写真：帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵）

第1章 十勝の平野や川ができるまで
第2章 先史時代と川
第3章 アイヌ文化と川
第4章 十勝開拓と川
第5章 発展、今、そして未来へ
用語
さくいん

1 帯広百年記念館（おびひろひやくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

2 帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひやくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

じょうもんじだい

縄文時代はいつからいつまで？ ... 北海道では「続縄文時代」もある

ぞくじょうもんじだい

本州以南では、1万3,000年前ころを縄文時代の始まりとしています。

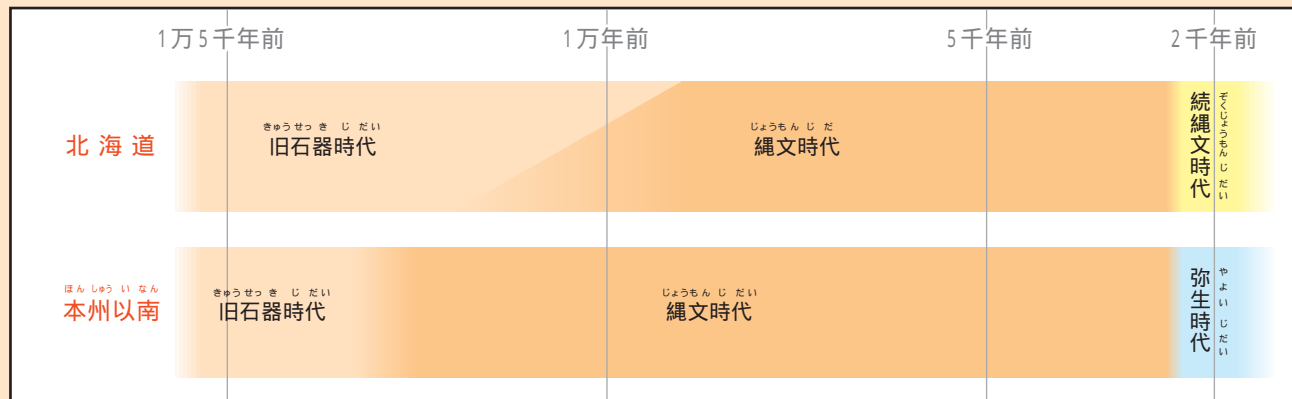
十勝でも、約1万2,000年前の土器が見つかります(大正3遺跡 p83)。しかし、次が約9,000年前の土器で、その間をつなぐ遺跡が見つかりません。そのため、十勝に1万2,000年前ころから縄文文化が定着したかどうか、今のところわかりません。

およそ9,000年前になると、帯広市南部の「八千代遺跡(p90)」をはじめ、十勝のあちこちで遺跡が見つかり出します。このころには、十勝は土器

と弓矢の文化に入っていました。ただし、日本列島全体の縄文文化と同じになるのは7,000年くらい前になってからです。

縄文時代が終わるのは、およそ2,500年前、本州以南に稲作や金属の道具が広まったころです。本州以南では、「弥生時代」へと入ります。

しかし、北海道では農耕社会には移らず、自然の中から食料を得る生活が続きます。そこで、本州以南で弥生時代が始まってからを「続縄文時代」と呼んでいます。(p100)



北海道と本州以南の時代のちがいが、ただし、本州以南すべての地域が一気に同じ文化に変わったわけではない。

木や骨、角の道具も使われていた ... 残っているものがすべてではない



紅葉山49号遺跡(石狩市)で見つかった「櫂」。舟をこぐもの。(写真:石狩市教育委員会蔵)

遺跡から見つかる道具は、土器や石器など長い間土の中にうまっていたのもくさらないものがほとんどです。

しかし、木でできた器や道具、動物の骨や角で作られた釣り針やいろいろな道具(骨角器)もたくさん使われていました。

ただ、これらのものは、長い間にくさって土にかえてしまったので、見られなくなったただけなのです。

十勝では見つかりませんが、貝塚や湿地の遺跡では、こうした道具がくさらずに残ることがあります。

例えば、石狩市の紅葉山49号遺跡では、4,000年くらい前の木製品(丸木舟の一部・舟をこぐ櫂・皿・石おのの柄など)が見つかります。(p93)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

3 縄文時代の始まり(じょうもんじだいののはじまり): この本では基本的に、約1万2千年前を十勝における縄文時代の始まりとしている。

4 貝塚(かいづか): 昔の人が食べた貝の貝ガラがたくさんたまっている遺跡。ただのゴミ捨て場ではなく、儀式(ぎしき)や祈り(いのり)の場とも考えられている。(p94)

土器づくり ... 1. 準備して形を作る

ここでは、土器づくりの大まかな流れを説明します。
 実際にうまく作るためには、各段階で、もう少し細かい技術が必要となります。

注意：土器づくりには、さまざまな「コツ」が必要です。とくに野焼きの時には危険な場合もあります。粘土を用意するところから、経験者に指導を受けるようにして下さい。

必要なもの

材料：粘土（ガケなどに露出していて、ねばり気のあるもの）
 川砂（粘土の10%くらいの量）

形作り：大きな葉っぱ、または、板、ぞうきん、水、タコ糸、粘土板

文様（もよう）づけ：ヘラ、縄、貝ガラなど
 野焼きのマキ：よく乾燥したもの。30cmの土器1個につき、10kgくらい（技術により変わる）

その他：シート、エプロン、など（野焼きの時には、軍手、火をつける道具、2～3mの棒など）

粘土に砂を混ぜてこねる

とってきた粘土は風通しのよい木かげなどに、くだいた状態で広げておきます（1週間以上）。

広げておいた粘土はカチカチにかわいています。石などの台の上で、ゴミをよけながら細かくくだきます。細かくくだいた粘土は、目の細かいふるいにかけて。

ふるいを通した粘土に、川砂（粘土の10%くらいの量）を混ぜ、水を加えて土を練ります。

練り上がった粘土は、むしろなどに包んで、1週間程度「ねかせ」ます。

ねかせた粘土はべたべたしますが、これがしっとりとなり、粘着力のある粘土になるまで、時間をかけて練り上げます。

（慣れないうちは、市販の粘土を使ったり、機械で混ぜてもらうのが無難かも知れません）

土器の形をつくる

粘土をダンゴにして、葉っぱ（ろくろのかわり）の上でたたきつぶして円ばん状の底にします。高さ30cmの土器で厚さ1cm以上。

次に、粘土ひもを作り、平らにのばして、はば5cm・厚さ1cmくらいの板にします。これを底の上に一段一段積み上げていきます。くっつきやすいように水を

少しずつつけて密着させます。つなぎ目をたんねんにヘラや指でこすってつぶし、すきまをなくします。

だいたい形ができたら、口のへりを切りそろえるなどして整えます。

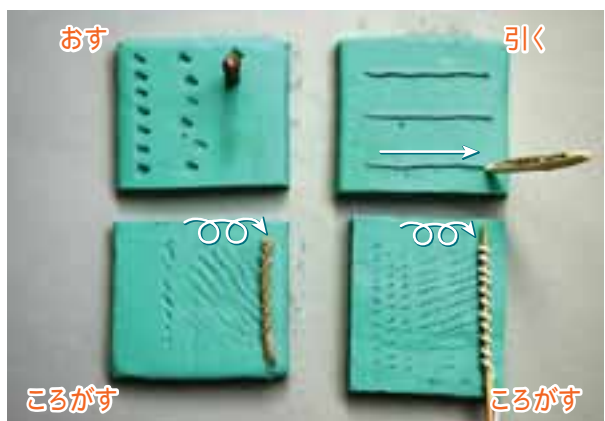
また、土器の外側と内側をヘラや小石、貝ガラなどでみがいて、形を仕上げ、水もれをふせぎます。

文様（もよう）をつける

表面が少し乾いたら、縄をころがして縄文をつけましょう。真横にころがしていくと、ななめの文様ができます。内側から手をそえて、形をくずさないように。

そのほか、細い粘土ひもをはりつけたり、ヘラなどで線を引きたり、貝ガラや棒をおしつけたりするなど、文様づけにはいろいろなやり方があります。

少し乾燥させて、表面をこすると少しツヤが出るようになったら、土器の内側を貝ガラや小石を使ってなめらかにします。水もれを防ぐためです。（土器の外側に手をそえるように）



文様のつけかた。縄を転がすと、ななめのもようができる。

第1章 十勝の平野が
川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

参考：「縄文土器を作る」（帯広・原始人の会、帯広百年記念館友の会）
 「縄文人になる！」関根秀樹、山と溪谷社、2002

「燃える男の土器の作り方のページ」園田（岩宿博物館友の会会員）
<http://homepage2.nifty.com/sonodaworld/makesearthenvessel1.htm>

どき 土器づくり ... 2. のや 野焼きする

かけ干しする

できた土器は、風の当たらない日かげで、ゆっくりと乾かします。2週間くらいは干します。急に乾かす

と、ひび割れのもとです。

のや 野焼き

まず、地面を乾かすためにたき火をします。この時、まわりに土器を置いて、ゆっくりあぶります。時々土器を回し、まんべんなくあたためましょう（1時間くらい）。

土器の色が変わり、地面の水分がぬけたら空だきは完了です。

マキがオキ火（炭火のような状態）になったら平らにならし、その上に土器を置きます。

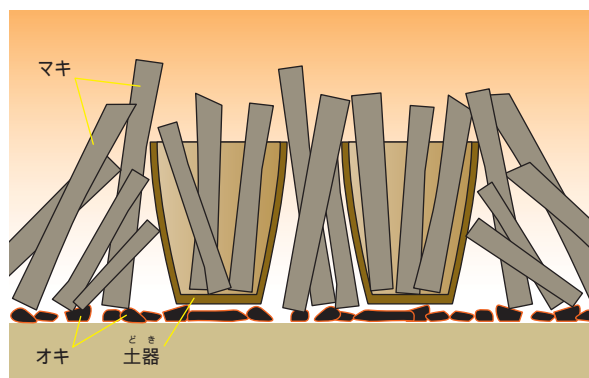
土器と土器の間や土器の中にもマキを差しこみ、さらに土器がかくれるくらいマキを周りに積み上げます。オキの熱で、マキには自然に火がつきます。

周りのマキが焼け落ちるころには、だいたい焼けています。長い棒を土器の間に差しこんで、そっと土器

をたおし、火を寄せて底を焼きます。

その後、自然に冷めるのを待ち、取り出します。土器がまだ熱い時にさわって、やけどしないように。

火を完全に消して、安全を確認したら完了です。



どきのや 土器の野焼きイメージ。マキで土器をおおってしまう。

火起こし ... 木と木をこすりあわせて

かつては、くぼみをつけた板の上で、木の棒をキリのように回転させて火を起きました。板はスギなどのやわらかい木、棒はヤマグワなどの固い木がいいようです。

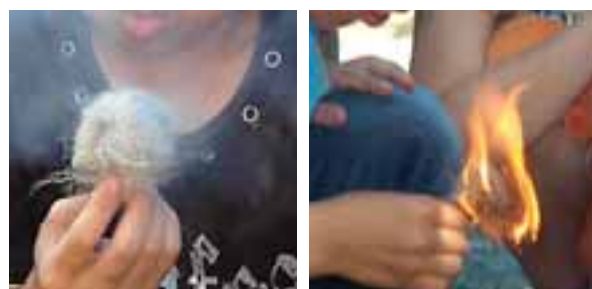
ただ、初めての人にはむずかしいので、写真のようなもう少し便利な火起こし道具（江戸時代からのものらしい）を使うといいでしょう。ひものねじりを使って回転させ、おもりはずみ車にしたものです。

木と木をこすりあわせることで「まさつ熱」をつくり出し、炭の粉をためます。そこへさらにまさつ熱を送りこむうちに、けむりが上がり、2mmくらいの炭火がとまります。

これを燃えやすいもの（ゼンマイの綿やタンポポの綿毛など。写真では麻ひもをほぐして鳥の巣のようにしたもの）に置いて包み、息をふきかけます。

もうもうとしたけむりが上がり、突然「ポツ」と火がつけます。あわてず落として、火ばさみで運びましょう。

最後に、つけた火は必ず完全に消すように。



得意、不得意はあるが、協力すれば子どもたちでも火が起きる。
（帯広市ジュニアリーダー養成講座あすかの会リーダーキャンプ）